

研究推進校事業報告書

<取組と成果のポイント>

○ 「考え、議論する道徳」の指導方法の工夫

- ・ 児童同士の意見の交流時間をとったり、心情表を活用して話し合う機会をとったりすることで、児童の微妙な意見の違いや変容を議論の場に引き出し、授業を進めることができた。児童も、自分の考えをしっかりと受け止めてもらえることで、全体の雰囲気と比較しながら、さらに考えを深めていくことができた。
- ・ I C T機器を道徳の授業に導入することにより、児童の考えを可視化することができたため、議論する上で大いに役に立った。

○ 評価方法の工夫

- ・ 道徳のワークシートをファイルにとじていくことで、児童はポートフォリオとして見返し、自身の学習を振り返りながら成長を確認することができた。教師側も、児童の学習前後の感想や考えから、児童の成長の評価につなげることができた。
- ・ I C T機器に振り返りを記録させることで、授業の終末で実際に友達の意見を見ながら振り返ることができるので、考えを共有したりさらに考えを深め合ったりすることにつながり、有効に活用することができた。また、教師側も最終的な学年末の評価の上で、蓄積されたその資料がとても有用であることが実感できた。

1 研究推進校の概要

学 校 名	所 在 地	電 話 番 号	児童数	備 考
犬山市立池野小学校	犬山市字杵下 5 1	(0568) 67-0544	114人	

2 研究課題

(1) 「考え、議論する」道徳の授業づくりの研究

- ① 多面的・多角的に物事を捉えたり、深く考え議論したりする道徳の授業の充実
- ② 子供たちが思考しやすく、話合いの深まりを期待できる板書の工夫

(2) 各教科や総合的学習の時間、特別活動等との連携を意識した教材の選定とカリキュラムの研究

- ① 各教科・行事等との関連を明確にした道徳教育の別葉の作成
- ② 教科書等の教材を中心とした道徳科の年間指導計画の作成

(3) 道徳の時間における評価の工夫・改善

- ① 毎時間のワークシート、ノート等の学習記録の望ましい累積の工夫
- ② 累積された学習記録から道徳性向上を読み取るための評価方法の工夫

(4) 家庭と連携した道徳教育の推進

3 研究主題

「特別の教科 道徳」を要とした道徳教育の充実

－「考え、議論する道徳」の指導と評価－

4 研究のねらい

本校では、道徳の時間を中心に、各教科、総合的な学習の時間、特別活動と関連を図りながら、教育活動全体を通して道徳教育を進めてきた。

平成30年度からの「特別の教科 道徳」の全面実施を受け、道徳教育推進教師を中心に、「考え、議論する道徳」の実践の試行錯誤を続けている。一学年一学級の特色を生かし、全担任の一人一研究授業はもちろん、指導案作成から研究協議まで全教職員が関わって、一つ一つの授業をつくり上げてきた。授業後の研究協議で出された課題を次の授業者が引き継ぎ、課題解決を目指すというリレー方式の授業研究にも取り組んできた。また、言語活動を充実させるために、ペア学習やグループ学習を取り入れ、考えを伝え合ったり解釈したことを説明したりするなど、思考力・判断力・表現力を養う授業の工夫を行ってきた。特に、道徳の授業では、心情表を用いて、仲間の多様な価値観や自分の心の変容を見つめながら考えを深め、自分の心情や思いを伝えられる児童の育成を目指して取り組んでいる。

しかし、道徳的判断力や実践意欲・態度の面を見ると、本校児童は決して十分とは言えない。道徳の評価に関しても教職員間で検討し、適切な指導につながられているかについての検証も十分ではない。道徳の授業をはじめとした道徳教育の推進を図り、物事を多面的・多角的に考えたり自己の生き方について考えたりすることにより、道徳的判断力や実践力を育んでいくとともに、適切な評価についても検証していきたい。

また、2年間におよぶコロナ禍での学校生活では、本研究に大きな影響を与え、様々な制約を受けることになった。道徳の授業で様々な教材に触れ、仲間の多様な価値観や自分の心の変容などを見つめる中で、考えを深めていき、自分の心情や思いを伝えることができる児童の育成を目標としているが、本年度は三密を回避しつつ、新たに導入された児童用タブレットを可能な限り活用し、実践を進めることにした。道徳の教材に触れ、内容を深く理解する中で、現在犬山市が取り組んでいる読解力向上にもつなげていきたい。

○ 地域の特色を生かした取組

- ・ 現職教育の研究テーマを「主体的に考え、学び合う道徳科の授業づくり ―考えを深め、伝え合う子どもの育成をめざして―」とする。
- ・ 一学年一学級の特色を生かし、道徳の授業研究に関して、全担任が一人一研究授業に取り組み、全教員で研究協議を行う中で、各自の道徳の授業力向上を図る。

① 外部講師派遣による授業力の向上

- ・ 学校の道徳教育重点目標を明確にし、道徳教育の全体計画、全体計画の別葉、年間指導計画（カリキュラム）の見直しを行う。
- ・ 外部講師を招聘しての授業研究や協議会の実施を通して、道徳の授業力向上を図るとともに、評価についての研究を進める。

② 家庭・地域との連携による取組

- ・ 学校公開日における全学級の道徳授業参観や保護者向け道徳ワークショップの開催、PTAによる子育て月間の取組などを通し、家庭・地域との連携・啓発を図る。
- ・ あいさつ運動などボランティア活動に保護者や地域の方の参加促進をする。

5 研究経過と計画

月	実 施 内 容	行 事 等
4 月	・ 教員への研究内容、研究目的の周知と共通理解 ・ 研究組織と研究計画の策定 ・ 道徳年間計画の作成 ・ 研究主題・仮説の設定	・ 縦割り協力班活動 (随時実施)
5 月	・ 授業研究指導案検討会(全教員) ・ 授業研究と研究協議Ⅰ (3年)	・ お話会開始(毎月実施) ・ 図書ボランティア読み聞かせ開始(随時実施) ・ 資源回収
6 月	・ 意識調査 (県教育委員会作成)	
7 月	・ 道徳教育推進研修会 (外部講師B①) ・ 授業研究指導案検討会(全教員) ・ 授業研究と研究協議Ⅱ (6年・外部講師A①) ・ 道徳教育推進研修会 (外部講師B②)	・ 小規模校交流会
8 月	・ 授業研究のための研修会 (外部講師A②) ・ 夏休み前までの取組に対する資料収集と分析、改善点の考察等	・ 資源回収 ・ 親子除草作業
9 月	・ 授業研究指導案検討会(全教員) ・ 授業研究と研究協議Ⅲ (5年・外部講師A③)	
10 月	・ 中間報告書作成 ・ 研究発表会参加 (新城市立黄柳川小学校) ・ 授業研究指導案検討会(全教員)	・ 運動会 ・ 5年自然教室 ・ 6年修学旅行
11 月	・ 授業研究と研究協議Ⅳ (2年・推進委員による学校視察) ・ 道徳一斉公開授業参観 ・ 保護者向け道徳ワークショップ (外部講師B③)	・ PTA子育て月間 ・ 資源回収
12 月	・ 授業研究指導案検討会(全教員) ・ 授業研究と研究協議Ⅴ (1年・外部講師A④) ・ 冬休み前までの取組に対する資料収集と分析、改善点の考察 ・ 意識調査 (県教育委員会作成)	
1 月	・ 授業研究指導案検討会(全教員) ・ 授業研究と研究協議Ⅵ (4年)	
2 月	・ 授業研究と研究協議Ⅶ (特別支援学級) ・ 保護者への教育活動アンケート ・ 事業報告書、完了報告書作成	・ 学び発表会 ・ 小中合同あいさつ運動 ・ 1、2年もちつき会
3 月	・ 研究のまとめ	・ 6年奉仕活動 ・ 卒業式

※ 4、5月は事業計画準備期間

6 研究課題に関わる取組

(1) 研究組織

研究主任を中心に、3つの観点から研究を進めた。

- ・ カリキュラムマネジメントに関して
- ・ 授業研究に関して
- ・ 評価に関して

(2) 研究内容

① カリキュラムマネジメントに関して

道徳の授業だけでなく、他学年児童や保護者との交流を重ねることで、道徳的判断力や実行力を高める活動に力を入れている。

(ア) 縦割り協力班の取組

本校は、全学年が単学級であるため、同学年の中では限られた人間関係の中での生活であり、変化に乏しい。そこで、1年生から6年生までの『縦割り協力班』という集団（6グループ）を設定している。1つのグループを、各学年2人から4人で構成し、19人ずつで活動している。6年生が中心となって、活動場所や活動内容を決め、活動している。以下、主な縦割り協力班の活動である。

- 縦割り遠足・・・近くの明治村まで歩いていく。園内をグループでミッションを遂行ながら、仲良く行動する。
- 縦割り交流活動・・・朝、授業前の時間を使って、グループごとにドッジボールや鬼ごっこ、フルーツバスケットなどを行う。
- 縦割り清掃・・・月に1回程度、校内の指定の場所を、グループ内で分担して清掃する。今年度は、コロナ禍のため、実施していない。
- 縦割りお別れ給食・・・卒業式前に、縦割り協力班で給食を一緒に食べる。グループのリーダーとしてがんばってきた6年生に、感謝の気持ちを表す場としている。



【縦割り遠足】



【縦割り交流活動】

(イ) 親子除草作業

夏休みの出校日に、親子除草作業を位置付けている。45分間ほど、親子で学校内の草取りを行う。暑い中で一緒に汗を流して作業することで、勤労の大切さや大人のたくましさへの理解を深め、成就感や達成感を共有するよい機会となっている。今年度は、降雨のため中止となった。



【一昨年度の親子除草作業】

(ウ) P T A子育て月間

毎年、秋にP T Aで子育て月間を設定している。昨年度は、各家庭の玄関先にホワイトボードを置き、親も子も出かけるときに「誰と」「どこへ」「いつ帰るか」などを書き込み、家族で安全安心を確認した。

今年度は11月に「あいさつ」について取り組んだ。「ありがとう」「いただきます」「おかえりなさい」「ごちそうさま」などのあいさつをするたびに表のイラストに丸を付けていく。親子で一緒に取り組み、互いの心の交流を深めていくことを目的としている。活動後には、大人からと子供からの一言感想をまとめた。正しい生活習慣の習得に役立ち、さらに親子や家族での相互理解が深まる取組となることを願った。

「ありがとう」で、みんな気分よく！ No.1										
年 児童名										
*「ありがとう」などのあいさつができたなら、左から順番にイラストに○をつけていきましょう！										
チェック日	親から「ありがとう」					子どもから「ありがとう」				
1日										
2日										
3日										
4日										
5日										

「ありがとう」で、みんな気分よく！
の取り組みについて2 R3.12.3

11月から開始した「ありがとう」で、みんな気分よく！の取り組みには、委員の皆様から多くのご協力を得て、1日ごとの振り返りと「2週間の一言感想」を記入したカードの提出も、2回目が終わりました。これまでのご協力、ありがとうございます。

継続したからこそ見えてきたこと、新たに気付いたことなどが出てきたのではないのでしょうか。月末の「一言感想」からも、それがうかがえます。今回もいくつか紹介しします。

<子どもから> <大人から>

自分ば、これからありがとうは外に、先がけあいさつもしていきたいと思ひました。

家族で「ありがとう」とたくさん言ってくれてうれしう。

やさしいことばが、あいらずいふことができてうれしう。

ありがとうと言ふと、相手も気持ちがよくなるんだと思ひました。

これからあいらずいふことで、人とのきよりを形作ていふと思ひます。あいらずいふことで、心と心が通じあふというこに気づきました。

「1か月間、継続してあいらずいふことで、家族以外へのあいらずいふことができるようになつた気がします。

気持ちを伝えることで、家族の中で会話が弾みやすくなつたと思ひます。お互いに気持ちが通じあふようになつた。

2回目の振り返りカードの記入で、今回の取り組みは一段の区切りとなりまふ。これまでのご協元に、心から感謝申し上げます。

【ありがとうカード】

【取組のまとめ】

② 授業研究に関して

本校は全学年とも単学級であるため、全担任が一人一授業に取り組んでいる。授業を行うだけでなく、指導案を作成する過程において全教員が指導案を検討し、授業研究後も全教員で研究協議を行っている。小規模校の優位性として、全教員で取り組むことによって、研究の全体像が共有され、次の授業研究につながっていく。

(ア) 全教員での指導案検討と研究協議

本校は、担任をもたない教員も含めて11人で道徳の研究を進めている。したがって、指導案の検討から、授業研究はもちろん研究協議まですべて全教員が参加している。これは研究を進めていく上で、とても有効に働いている。教員の意識が共有され、同じ目線で研究を進めていくことができる。自分が道徳の研究授業を行う際は、先に実施した仲間の授業を参考にすることができる。また、自分の授業を反省して、次の教員の授業研究に参加することができる。いずれにしても意識を高くもって、道徳の授業に臨むことができる。1つの授業の中で生まれた課題を次の授業につなげ課題解決をするという「リレー方式」で進めている。

これまで、以下のような課題解決につなげていった。

- 学習のめあてを板書したことで子供の意識が偏ってしまったため、あえて「めあては書かないほうがよい」教材があることが分かった。
- 教材の内容をしっかり追っていくと時間がかかるので、児童にあえて挙手をさせずに、どんどん物語を確認していった方がよい場合が多いことが分かった。
- 児童が自分の意見をワークシートに書く場合、まとめた人から順に友達と交流させていくと、短時間で交流を進めることができ、また、なかなか考えがまとまらない児童も友達の意見を参考にしてまとめやすくなることが分

かった。



【全教員での研究協議】



【意見交流する児童】

(イ) 心情表の活用

心情表には、いろいろなパターンがある。円形のもの、数直線のもの、タブレットを使用したもの、中には項目が2つあって4部分に分かれるものもある。発問に対して、自分がどう考えているか、友達がどう考えているかを視覚的に捉えることができ、授業が進んでいくにつれ、その意見がどう変容していったのかをすぐに把握することができる。以下に、心情表を活用することで、授業がより深まる利点を示す。

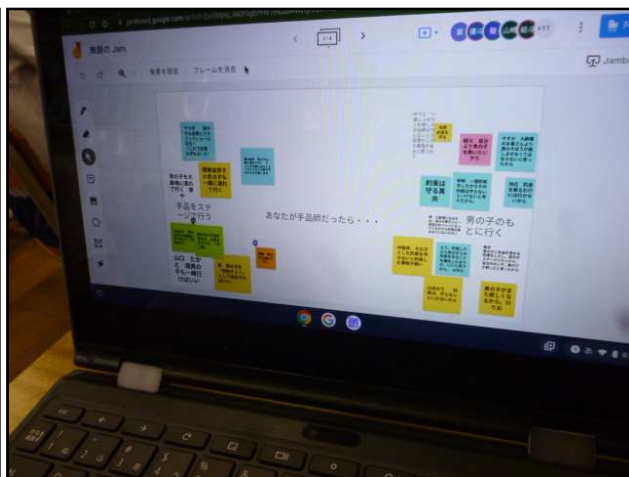
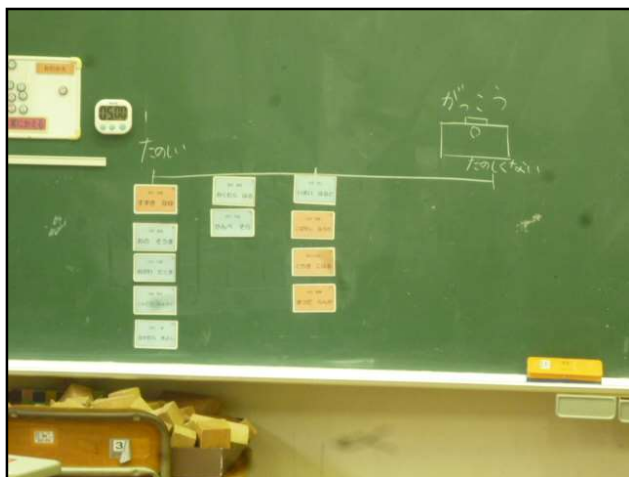
- ・ 学級全体での動向と個人の考えの比較ができる。
- ・ 誰がどんな考えなのかを視覚的に分かるため、話合いの深まりにつなげることができる。
- ・ 考えが変容していった場合、どうして変わっていったのか、また、話合いを経ても考えが変容しない場合は、どうしてなのか等をすぐに確かめることができる。



【心情表を操作する児童】



【心情表に名前カードを貼る児童】



【心情表のいろいろなパターン】

(ウ) 多面的・多角的な意見を視覚的に表す板書の工夫

教材の内容の概要を簡潔に黒板にまとめている。文字だけでなく、登場人物のイラストも一緒に貼り付けている。その表情からいろいろな気持ちを読み取れるため、児童が考えをまとめるためのよい材料となる。

意見の分かれる主発問では、似ている意見ごとに、スペースを分けて板書している。



自分の考えはどちらに近いのかを確認でき、自分の意見と同じ部分、異なる部分を視覚的に捉えやすくなり、さらに考えを深めることができる。

授業の終末で、必ず全員で押さえておきたい内容については、板書の色を変えたり文字を大きくしたり、線で囲んだりして、目立つように工夫している。黒板を見れば、1時間の授業内容を一目で理解し、振り返られる板書を目指している。

【一目で内容が分かる板書の工夫】

(エ) 児童の考えや話し合いを深めるための発問の工夫

教員の発問は、児童の思考や話し合いを深める決め手になる。特に、児童の意識の流れや疑問を予想した発問、個性的な考え方が引き出される発問、心が揺さぶられる発問などを考えたい。以下、本校で「発問とは」という形でまとめた。

- ・ 児童が実際に即して、心が揺さぶられるようなもの
- ・ 児童が自由に自分の感じ方や考えを表現でき、多様な価値観や考え方が出るもの
- ・ 何を問うているのかが明確なもの
- ・ 自分のこととして考えられるもの
- ・ 誰でも答えられるもの

これを基に、外部講師に、もっと具体的に「考え、議論する道徳」をつくるための発問の例を示してもらった。

「考え、議論する」道徳をつくる新発問パターン 50

【問題把握の発問】

- 1 ○○(□□)について知っているか
- 2 ○○(□□)についてどう思うか
- 3 ○○の経験はあるか
- 4 ○○(□□)と言ってイメージすることは何か
- 5 心に残った場面はどこか
- 6 みんなで話し合いたいことは何か
- 7 ここでは何と何が問題になっているか

【教材と向き合う発問(共感的発問)】

- 8 ○○はどんな気持ちか
- 9 ○○はどんな思いで～しているのか
- 10 ○○のとき、同じ気持ちになったことはないか

【教材と向き合う発問(分析的発問)】

- 11 本当の□□とはなんだろう
- 12 □は本当に大切なのだろうか
- 13 ○○の心を支えたものは何か
- 14 ○○がそうしたのはなぜか
- 15 ○○と○○の考えはどんな違いがあるのか
- 16 AとBではどちらが□□か
- 17 自分は□□についてどう考えるか

【教材と向き合う発問(投影的発問)】

- 18 自分が○○ならばどう考えるか
- 19 自分ならこの場面でなんとと言うか
- 20 自分なら○○のようにできるか

【教材と向き合う発問(批判的発問)】

- 21 ○○がしたこと(行為)をどう思うか
- 22 ○○の生き方をどう思うか
- 23 この□□(価値)をどう考えるか
- 24 ○○は本当そうしてよいのか
- 25 ○○に心打たれるのはなぜか
- 26 ○○にどんなことが言いたいのか
- 27 この話に納得できるか

「考え、議論する」道徳をつくる新発問パターン 50

【考えを一層深める発問(補助発問等)】

- 28 ○○さんの考えに対してみんなはどう思うか
- 29 それでいいのか? (先生は○○だと思う)
- 30 人間としてどうあるべきか
- 31 他に考えるべきことはないか
- 32 逆に考えたらどうか
- 33 分けて考えたらどうか
- 34 ここに何かを加えたらどうか
- 35 もし、○○の場合だったらどうか
- 36 登場人物はどうしたらよかったか
- 37 もっとよい解決方法は何か
- 38 自分が同じようにされてもよいのか
- 39 いつ、どこで、誰に対してもそうできるか
- 40 演じてみてどう感じたか(役割演技)
- 41 演じた人を見てどう感じたか(役割演技)
- 【自分を見つめる発問】
- 42 同じような経験をしたときどう思ったか
- 43 あなたは登場人物(○○)と似ているか、違うか
- 44 登場人物にどんなことを伝えたいか
- 45 あなたの生活に生かせそうなことは何か
- 46 ～するのに大切な心はなんだと思うか
- 【価値を把握する発問】
- 47 一番心に残ったことは何か
- 48 一番大切だと思ったことは何か
- 49 友達の考えで印象に残ったのは何か
- 50 新しい発見があったか。 あつたとすればそれは何か

【新発問パターン 50】

(オ) 一斉道徳授業参観

11月20日に、全校一斉道徳授業参観を実施した。保護者に2年ぶりに授業の様子を見ていただくとともに、これまで取り組んできた道徳授業の成果を見ていただくよい機会となった。帰宅後に、親子で道徳に関しての意見交流などができるよい機会ともなった。



【道徳授業参観の様子】

③ 評価に関して

(ア) ワークシートでの評価

道徳の授業ごとに、ワークシートを作成している。1時間の授業で、書く項目を2つか3つにしぼるようにしている。最後の振り返りを除き、書くことはあくまで発表する、自分の考えをまとめる上でのメモと位置付け、あまり時間をかけないように進めている。発表時には、書いてないことを発表してもよく、友達の意見を聞いて自分の考えが変わっていてもかまわない。友達の参考になる考えを、用紙の片隅にメモする児童もいる。



【ワークシートに書き込む児童】

毎時間のワークシートをファイルにとじ、道徳授業のあゆみとしている。自分で自分の成長の証を確認することができ、教員も評価する上で有効な指標となる。

(イ) ICTによる評価

道徳授業のまとめとして、タブレットを使って、共通のシートに自分の感想や分かったことを書き込んでいく取り組みを始めた学級もある。児童は、書き終えた後、友達の意見を見ることができ、自分の考えと比較して、考えを深めることができる。教員も児童の書いたシートを見て、新たな考え方を取り出して議論させることもできる。もちろん内容は保存されているので、事後評価の観点から、後日有効に使用することもできる。



【電子黒板に映される全員の考え】

(ウ) 記述式評価

講師による研修の中で、評価について研究を進めた。本校は、児童に記述式で評価を与える場面は、年度末に1回である。しかし、その評価を大切にしたいと考え、どう表現したらよいのか研修をした。

親切に関する学習では、主人公のおおかみと同じような動作を通して、親切にする気持ちのよさを感じ、身近にいる人たちに親切にするようになりました。

下線部のような評価の表現はしない。なぜなら、道徳科の評価の中で、その子自身の「行動や人間性」を評価しないからである。道徳の授業の中では、「学習活動の状況」と「道徳性の成長の様子」の2点から評価をするのがよい。多面的・多角的な見方へと発展しているか、道徳的価値の理解を自分自身との関わりの中で深めているかを見極めていきたい。

具体的には、以下のように文章をまとめていく。

(価値) 学習では、(思考の内容) について、(学習活動) ができました。
(価値) を話し合う中で、(思考の内容) を知りました。また、(学習内容) により (学習成果) を感じることができました。
(教材名) では、(学習活動) により、(学習成果) に気付きました。

7 研究の成果と今後の課題

(1) カリキュラムマネジメントについて

○縦割り協力班で他学年児童と活動することで、児童は自分の立ち位置や役割を自然に理解し、行動していくことが身に付いていった。[グラフ1] 本校では協力班活動が継続的に取り組まれているので、伝統的に道徳的判断力や実行力が育まれていると考える。

●昔から、親子で取り組む活動、他学年と取り組む活動が数多く計画されている。しかし、昨年度よりコロナ禍によって、縦割り清掃・縦割りお別れ給食・児童参加資源回収・親子給食・もちつき会など、様々な取組が中止や変更となってきた。

それぞれに意味があり、児童にとっては大切な道徳実践力を養う場であった。大切な行事に関しては、この2年間で実施できなかった取組を確実に引き継ぎ、コロナ禍後へしっかりとつないでいく必要がある。

(2) 授業研究について

○全教員で授業研究を進めてきたことによって、道徳の授業に関する共通理解を図れるようになってきた。[グラフ2] 道徳の授業は全学級ともに火曜日1限に設定しているので、月曜日下校後ともなると、翌日の道徳授業に関して相談や意見が活発に飛び交う。教材は異なるものの、「リレー方式」で他学年のよい部分を取り入れながら進めてきたおかげで、一人一人が自分事として考え交流し、授業に生かしていけるようになった。

○以前の道徳の授業では、AかBかを選び、議論することが多かったが、「考え、議論する」道徳に移行することによって、児童の微妙な意見の違いや変容を大切にできるようになってきた。本校では、心情表やICT機器を活用することで、それを可視化している。児童は、自分の考えを友達の考えや全体の雰囲気と比較しながら、さらに考えを深めていけるようになった。[グラフ3]

●長年、教室の中で机を「コの字型」にして、児童が向かい合って、道徳の授業を行うことを基本としていた。しかし、コロナ禍によって、現在は全員が黒板の方を向いた一斉授業となっている。授業中での意見交流（ペア交流・グループ交流・自由交流など）も、最低限にとどめている。どうしても教員とのやりとりとなる状況になりやすく、以前のような児童同士で授業をつくる環境を取り戻してやれば、もっと活発に議論ができるのではないかと考える。

(3) 評価について

○これまでは児童のワークシートをファイルにとじ、ポートフォリオとして有効活用してきた。今回、外部講師から教えていただいたICT機器を活用した取組が、授業中も効果的であり、最終的な学年末の評価の点でも有効であることが分かった。[グラフ4] 教師自身がICT機器の活用についてまだ習熟できていない部分があるが、工夫次第でまだまだいろいろな使い方ができそうである。

●ワークシートやICT機器で累積された学習記録から、どのように道徳性の向上を読み取ったらいいのか、共通理解されたものがまとまっていない。今のところ各教員の感覚に頼っている。今後、研究を重ねてまとめていきたい。

